

マルコによる福音書5章「イエスの制圧する力」

1A レギオンからの解放 1-20

1B 地方を支配する闇の力 1-10

1C 人間破壊 1-5

2C 服従を強いられる霊 6-10

2B イエスを締め出す地方 11-20

1C 海に突入する豚 11-13

2C 地方から追い出す飼い主 14-20

2A 病を制する方 21-43

1B 追い詰められた司 21-24

2B 逆説的励まし 25-34

3B 信じる者だけに見せる力 35-43

本文

マルコによる福音書5章を開いてください。福音書は四つありますが、それぞれに特徴があります。マルコによる福音書には、それほどユダヤ教や聖書の背景がなくとも、ただその記録を読んだだけで、「ああ、この方は神から来た方なのだ」と分かるように書かれています。キリスト者への迫害が始まっているローマで、ローマの人たちを意識して書いたと言われてはいますが、マルコ5章は、その中でも、際立っています。それは、イエスの力が、これほどまでに大きいものなのか？ということです。それで、この方が神からの方で、ローマ皇帝に使っていた呼び名である、「神の子」であることが分かるのです。神の子であり、神ご自身です。

前回、私たちは、イエス様が向こう岸に渡ろうと言われて、弟子たちと共にガリラヤ湖で舟に乗られたところを読みました。強風が吹いて、嵐が起きましたが、イエス様はぐっすりとおられました。弟子たちが、恐れ、慌てふためいて、イエス様を起こした所、イエス様は、「黙れ、静まれ」と言われました。すると、風がやみ、すっかり凪になりました。自然界が荒れている所に対して、それをさらに大きな力で制することがおできになる方なのです。

主は、いろいろな意味で、荒れたところに平和と平安をもたらされます。そういった荒れているに対して、さらに、はるかに大きな力で「制圧」して、それを静めることをなさるのです。そして、私たちは5章で二つの大きな奇蹟を見ますが、悪霊追い出しの中でも、何干とある悪霊が一人の男の中に取りついていた中における、悪霊追い出し、それから、死に瀕して、実際に死んでしまった娘の生き返りについて見て行きます。

1A レギオンからの解放 1-20

1B 地方を支配する闇の力 1-10

1C 人間破壊 1-5

1 こうして一行は、湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。

「湖の向こう岸、ゲラサ人の地」というのは、大きな意味合いを持っています。ガリラヤ湖というのは、とても小さな湖で、車であれば 1 時間ちょっとで周回できてしまうのではないのでしょうか？けれども、どの位置かによって一気に地域が変わってしまうようなところです。

イエス様の一行は、カペナウム辺り、つまり湖の北側におられて、そこから東側にある「ゲラサ人」の地に来ました。つまり、デカポリス地方です。デカポリスは 20 節に出てきます。デカポリスとは、ギリシア時代に造られた、10 の町の植民地です。そのうち、ベテ・シェアンあるいはスキトポリス以外は、全てガリラヤ湖やヨルダン川の東にありました。ローマ時代においても、免税の特権が与えられ、自由都市としての結びつきがありました。ゲラサというのは、今のヨルダンの中部にあるデカポリスの町の一つで、今はジェラシュと呼ばれていますが、その町のことを意味しているのではなく、ゲラサ地方という意味で使われているのでしょうか。いずれにしても、そこはユダヤ人にとっては全く別世界であり、異邦人が大半で、わずかにユダヤ人が住んでいるのみでした。

2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊につかれた人が、墓場から出て来てイエスを迎えた。

これから壮絶な、霊の戦いが繰り広げられます。先の湖での嵐は、まるでその戦いの予告であるかのような出来事であったのかもしれませんが、そこにイエス様が立ち入られたら、汚れた霊につかれた人が、イエスを迎えています。迎えているというのは、ひざまずいているというような意味です。イエスの圧倒的な力によって、自分が滅ぼされそうになっていて、それでひざまずいて、そうしないように懇願している、という感じです。

私たちは、汚れた霊であるとか、悪霊について、なかなか実感が湧きません。けれども、世界では悪霊につかれている人々についての証言は無数にあります。また、社会で起こっているいろいろなことは、悪霊による仕業であることが言えるかもしれません。例えば、人々が年間、一万、二万単位で日本では自殺を図っていますが、そこに人々を滅ぼし、殺すサタンの思惑が確実にあります。神にこよなく愛されている一人一人なのに、価値はないとしている声を聞かせているのは、サタンです。

聖書には、ユダの手紙に、おそらくこれらが悪霊の起源ではないか？と思われる箇所があります。「またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。(6 節)」天使たちだっ

たのですが、サタンと共に自分のおるべき領域を守らずに、墮落した者どもということです。暗闇の中に閉じ込められている者たちもいるのですが、一部は地上に徘徊しているということです。黙示録には、竜として現れているサタンの姿がありますが、「12:4 その尾は天の星の三分の一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした。また竜は、子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。」とあります。この天の星の三分の一というのが、墮落した天使どもではないか？と思われるのです。

3 この人は墓場に住みついでいて、もはやだれも、鎖を使ってでも、彼を縛っておくことができなかつた。4 彼はたびたび足かせと鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまい、だれにも彼を押さえることはできなかつた。5 それで、夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていたのである。

サタンの行うことは、告発すること、そして破壊することです。神のかたちに造られた、その尊厳を徹底的に虐げるように仕向けます。また、ユダヤ人にとって、まるで異教、汚れた世界であることでしょう。「墓場に住みついでいて」とありますが、律法では死体に触れることは汚れると教えられていますから、墓に住みついでいるというのは、汚れの極致です。けれども、律法をもたない我々にとっても、墓場に住みつくというところに、気味悪さを感じないでしょうか？ところが、当時の墓場は洞窟でした。そういった洞窟に住み着いていたと考えられます。

そして、超自然的な力が、彼を暴れさせていました。物理的な鎖をもってしても、抑えることができませぬ。そして、内面の平安を奪われています。夜昼、ずっと叫び続けています。それから、自傷行為をさせています。どうしようもない力によって内面の平安が奪われ、そして自傷行為をしていく、ということは、私たちにも身近ではないでしょうか？この出来事は、決して遠い話ではなく、悪霊どもの仕業であることも多くあるのです。

2C 服従を強られる霊 6-10

6 彼は遠くからイエスを見つけ、走って来て拝した。7 そして大声で叫んで言った。「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。神によってお願いします。私を苦しめないでください。」8 イエスが、「汚れた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。

ここで繰り広げられているのは、悪霊どもが徘徊し、支配していた領域に、イエス様が入り込んで、制圧しようとしておられる場面です。まず、彼が叫んでいますね、「いと高き神の子イエスよ」と。神の子、イエス・キリストの福音の始まり、というのが、マルコ伝の初めの言葉でした。イエスが人の子だけでなく、神の御子であることを、天や目に見えない霊の世界に生きている悪霊どもこそ、よく知っていました。カペナウムでも、汚れた霊につかれた人が叫びましたね、「1:24 ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」その汚れた霊も、神の聖者であるとしてイエス様の正

体を明かしました。

そして、「私とあなたに何の関係があるのですか。」と言っています、カペナウムでも汚れた霊がそう言いました。これは、「俺たちの領域に、お前が何で関わってくるのか？」という意味です。悪霊どもが支配していた地域に、どうして入り込んで来るのか？ということです。私たちが福音を伝え、「私たちは、そんなことは関係ないですよ」と断られることが多いでしょう、その全てが悪霊の仕業ということではありませんが、イエス様がその人たちの生活の領域に入るといことは、半ば、暴力的なことだと彼らはみなしているのです。自分たちの持っている秩序を壊さないでくれ！という叫びです。汚れた霊の場合は、「苦しめないでください。」と言っていますが、これは自分たちが閉じ込める暗闇、あるいは底知れぬ所に縛り付けて、滅ぼさないでほしいということです。このように、イエス様が来られるということは、人々を苦しめている悪の勢力に対して、圧倒的な力を持って制圧する働きを行われています。

9 イエスが「おまえの名は何か」とお尋ねになると、彼は「私の名はレギオンです。私たちは大勢ですから」と言った。10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないでください、と懇願した。

名前を聞いていますが、これはユダヤ教における悪霊追い出しで、行われていたことでした。悪霊のほうも、お前は神の子だと正体を明かしましたが、イエス様も名を聞いて、それでその正体を引き出しておられます。レギオンとは、ローマ軍の 3000-6000 人の単位の軍団の名称です。ですから、この人の内になんと、最低三千もの悪霊が棲みついていたことになります。とんでもない数です！先日、インドネシアで海岸に打ち上げられていたクジラから 100 以上のプラスチックのコップが発見されたというニュースを見ましたが、おぞましいと思いました。それどころではありません、とんでもない数の悪霊が、吹き溜まりのようにして住んでいたのです。そして、レギオンはローマの軍隊の呼び名であるように、とてつもない力と圧制を表していました。しかし、そのとてつもない力と圧制を、なおのこと、圧倒的な力をもって制圧しておられるのがイエス様です。

「この地方から追い出さないでください」と懇願しています。ユダヤ人の少ないこの地方に、イエスが再び来ることは少ないだろうと見たのでしょうか。また、異邦人が大半で、そこで行われている悪霊にまつわる慣わしの強いこの地域だったのででしょうか、そこから離れることは、汚れた霊としては苦痛であったのかもしれませんが。

2B イエスを締め出す地方 11-20

1C 海に突入する豚 11-13

11 ところで、その山腹では、おびたしい豚の群れが飼われていた。12 彼らはイエスに懇願して言った。「私たちが豚に入れるように、豚の中に送ってください。」13 イエスはそれを許された。そこで、汚れた霊どもは出て行って豚に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖へなだれ込み、その湖でおぼれて死んだ。

この霊の戦いは、人間的には、ハリウツの映画に出てくるような場面を思い出したらよいかもしれません。ちょうど悪者の犯罪集団のところに、圧倒的な力を持つ銃器をもって制圧している正義の軍団がいて、圧倒的な攻撃に恐れおののいて、憐れみを請うている姿です。逃げる道を敢えて与えているのですが、それは完全に敗退して、もはや二度と悪さをしないようにさせています。

この地方から追い出さないでくださいと懇願するも、イエス様はお許しにならなかったのでしょうか。けれども、そこに、おびたしい豚が飼われていました。私たちににとっては、豚といっても大したことではないですが、ユダヤ人にとっては律法によって、汚れているとみなされた生き物です。異邦人が大半であったし、また少数のユダヤ人が、異邦人に混じって豚を飼っていたということも考えられます。もしユダヤ人が飼っていたとしたら、分かり易く言えば不法ビジネスをしていたことになり

ます。いずれにしても、そういった汚れているとされている動物に入ることを悪霊は望みました。悪霊は、体がないと非常に苦しみます。それで住むところを探しますが、その男から出て行くのであれば豚に住んでも構わないとしました。そして、イエス様が許されます。それで豚に入りますが、なんと、二千匹もの豚の群れが崖を下って湖になだれ込みました。湖の中で、どうなったのでしょうか？聖書では、海の深みに罪を投げ入れることが、ミカ書の最後に書いてあります。海の底は陰府に下る、つまり悪霊の閉じ込められている暗闇も近いとも言えます。結局、イエス様は彼らを、その地方から追い出すようにされ、闇の勢力を無力化しました。

非常に興味深いのは、一連の対決を見て、レギオンが一切、イエス様の許可なくして、何もできなかったということです。黙示録を見ても、数多くの悪魔や悪霊どもの動きがありますが、いずれも、全能なる神の許しの中でのみ、動いています。神と悪魔を同列に置くような二元論がありますが、それは聖書が語っているものではありません。圧倒的な力を神が有しておられ、悪魔や悪霊どもでさえ、神に反対しながら神の許しなしには、何もできないということです。ここから私たちは、希望を見いだします。つまり、どんな悪やその压制を見ても、神はそれをも支配しておられる、ご自分の御手の中に入れておられるということです。そして、そのような悪でもあっても主がご自分の栄光のためにお用いになることさえあるということです。

2C 地方から追い出す飼い主 14-20

14 豚を飼っていた人たちは逃げ出して、町や里でこのことを伝えた。人々は、何が起こったのかを見ようとやって来た。15 そしてイエスのところに来ると、悪霊につかれていた人、すなわち、レギオンを宿していた人が服を着て、正気に返って座っているのを見て、恐ろしくなった。

弟子たちが、嵐が静まったのを見て、非常に恐れたと 4 章 41 節に書いてありますが、同じように、ここにいる人々も恐ろしくなりました。

16 見ていた人たちは、悪霊につかれていた人に起こったことや豚のことを、人々に詳しく話して聞かせた。17 すると人々はイエスに、この地方から出て行ってほしいと懇願した。

ここです、恐ろしいのはこちらではないでしょうか。確かに、自分たちの経済的損失はあります。けれども、これまでレギオンに悩まされていた人が、解放されて正気に戻ったのです。これこそが福音、良き知らせです。しかし、この人たちは経済的損失のほうが、この男が解放されるよりもっと大事だったのです。福音の敵というのは、こういった安定志向です。つまり、「どんな悪いことが起こっていても、今のままでいたい」という願いです。それがどんなに悪くても、騒動が起こるより、秩序が乱れるよりも、イエスによる光、解放のほうを憎むと言う立場です。

汚れた霊でさえ、イエス様を追い出すことはできませんでした。けれども、神の形に造られた人は、イエス様を自分たちのところから追い出すことができました。ここが、皮肉です。神はご自分のかたちに人を造られました。ですから、このような良き知らせも拒む意志の自由も与えられていません。神の形に造られて故、自ら汚れた霊どもの支配も良しとするほうを選ぶのです。しかし、次にすばらしい話があります。

18 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供させてほしいとイエスに願った。19 しかし、イエスはお許しにならず、彼にこう言われた。「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい。そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい。」20 それで彼は立ち去り、イエスが自分にどれほど大きなことをしてくださったかを、デカポリス地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた。

イエス様は、ユダヤ人たちの間におられる時は、「このことを話してはいけない」と強く戒められることが多かったです。それは、まだ不十分なままでイエス様のことが伝えられて、それで誤ったメシアへの期待への変質することを恐れておられたからです。しかし、ここではその逆です。レギオンにつかれていた人は、お供させてほしいと言っています。つまり弟子になりたいということです。ところが、イエス様はそれをかえってお許しになりませんでした。むしろ、なるべく、主がなさった大いなること、また憐れんでくださったことを言い広めなさいと命じられたのです。おそらく彼自身が異邦人で、これからイスラエル人に対する働きを続けて行くのに、彼がいることは、ユダヤ人につまずきになりかねないと思われたのでしょう。しかし、むしろ、自分の身に起こったことを言い広めなさいと命じられました。間違ったメシアへの期待というものは、ユダヤ人にあるようなものは、異邦人には元々ないから、そのような心配は必要ありません。

その地方の人々はイエス様を拒みました。しかし、悪霊から解放された本人がいわば宣教師となって、福音宣教者となってデカポリス地方全体に言い広めることができたのです。後に、四千人の給食の奇跡があります。それはこちら側、ガリラヤ湖の東側で起こったのではないかとされています。確かに、デカポリス地方にも、つまり異邦人が多くいる中にもイエス様を求め、イエス様

を信じて行く人々が起こされていったのです。神の福音は、このようにして人々の頑なさによって阻まれることなく、広がって行きました。

2A 病を制する方 21-43

1B 追い詰められた司 21-24

21 イエスが再び舟で向こう岸に渡られると、大勢の群衆がみもとに集まって来た。イエスは湖のほとりにおられた。

イエス様の一行は、再びカペナウムの付近に戻ります。大勢の群衆がやって来たので、イエス様は中に入ることができず、ほとりにおられました。

22 すると、会堂司の一人でヤイロという人が来て、イエスを見るとその足もとにひれ伏して、23 こう懇願した。「私の小さい娘が死にかけています。娘が救われて生きられるように、どうかおいでになって、娘の上に手を置いてやってください。」

午前礼拝でお話ししました、ヤイロについての話です。5章には、二つの話に共通したことがあります。「ひれ伏す」ということです。イエス様は、レギオンに対して拝するところまで、ご自分の権威と力を示されました。そして彼が豚の乗り移るところまで追い込まれました。ここでは、ヤイロの高い地位、無関心や、いや敵対心もあったかもしれませんが、すべてのものを捨てることまで、追い込まれているイエス様の姿があります。それは、彼の娘が死に至る病にかかることを神がお許しになっているということです。会堂司が、他のユダヤ教の指導者と同じように高い地位にいる人で、安息日のことでイエス様が人を癒されているのに腹を立てていたかもしれません。けれども、イエス様のところにひれ伏させたのは、自分の大切な娘の命が取られそうになっていたからです。主は、このように、とても愛されているがゆえに、敢えて暴力的なことが身の上にかかるようなことをされます。そのことによって、ようやく主のところにひれ伏すことができるからです。

24 そこで、イエスはヤイロと一緒に行かれた。すると大勢の群衆がイエスについて来て、イエスに押し迫った。

湖のほとりにおられたのですが、ヤイロの家に行くために行こうとされたら、群衆が付いてくるので、押し迫って来ます。ヤイロによって、これは大きな焦りとなったことでしょう。今にでも死にそうになっているのに、たどり着けるのか？間に合うのか？ちょうど、瀕死の状態の人を救急病院に連れて行くのに、道路がとてつもなく混雑していたような状況です。ところが、次にその道を全く別の形で阻まれるような出来事が起こります。

2B 逆説的励まし 25-34

25 そこに、十二年の間、長血をわずらっている女の人がいた。26 彼女は多くの医者からひどい

目にあわされて、持っている物をすべて使い果たしたが、何のかいもなく、むしろもっと悪くなっていた。

十二年の間の不正出血です。彼女はおそらく成人してからの生活のほとんどを、この長血との戦いで苦しんできたのでしょう。体の苦痛もさることながら、最も苦しいことはイスラエルの共同体の中に入れてもらえていなかったことです。レビ記 15 章 25 節以降に、不正出血の女が儀式的に汚れることが教えられています。「15:25-26 女に、月のさわりの期間ではないのに、長い日数にわたって血の漏出があるか、あるいは月のさわりの期間が過ぎても漏出があるなら、その汚れた漏出がある間中、彼女は月のさわりの期間と同じように汚れる。その漏出の間は、彼女の寝た床はすべて、月のさわりの時の床と同じようになる。彼女が座った物はすべて、月のさわりの間の汚れのように汚れる。」彼女の床であれ、座った物であれ、出血が続いている間は汚れていたものとみなされていました。したがって、十二年間、彼女はまともに入々の間に入ることはできませんでした。

さらには、医者の治療が何にも役に立っていなかったどころか、むしろ症状が酷くなっていました。その間、治療費として支払って、財もなくなり、貧しい状態でした。その時にイエス様のお話を聞いたのです。

27 彼女はイエスのことを聞き、群衆とともにやって来て、うしろからイエスの衣に触れた。28 「あの方の衣にでも触れれば、私は救われる」と思っていたからである。29 すると、すぐに血の源が乾いて、病気が癒やされたことをからだに感じた。

女は、後ろからイエス様の衣に触れています。汚れた身でありますから、こっそりと触らなければいけないからです。そして彼女には信仰がありました、「あの方の衣にでも触れれば、私は救われる」ということです。ここの「衣」ですが、イエス様が着ているものはユダヤ人として、房がありました。「申 22:12 身にまとう衣の四隅に房を作らなければならない。」とあります。ユダヤ教の教師として、イエス様もこの衣を身に着けておられたでしょう。注解書には、これが、彼女が房に触れば治るといふ迷信を信じていたからだというものがありました。ならば、どうしてその後ですぐに血の源が渴いたのでしょうか？ どうして、イエス様が彼女の信仰が彼女を救ったと言ったのでしょうか？ 迷信ではないと思います。

彼女は、自分が汚れた身であり、この方に触れていただくとしても、大胆にお願いすることは無理に決まっていると思っていたことでしょう。そして、大胆に手で触っていただくことさえもできないと思っていたことでしょう。だから、その衣の隅にあるものであっても、それでも触ることさえできればよい、そうすれば治ると信じたに違いありません。かつて百人隊長が、しもべが病の時に、「家にお越しにいただく資格はありません。ただ、おとこばをください。」と言ったのと似ています。ここに、彼女の信仰が表れていました。たとえ、自分がその恵みを受ける比較がなくても、それでも、

憐れみを受けたいと強く願っていたことです。十字架にイエス様がかかっている時に、隣にかかっていた罪人の一人が、自分が受けているのは当然の罰であることを受け入れた上で、イエス様が御国に入られる時は、自分も覚えていてくださいとお願いしたのと同じです。

ですから、これは迷信どころか、彼女が自分の置かれている身から、イエス様に精一杯、近づこうとする信仰の現れなのです。多くの人が、このように具体的にイエス様の近づこうとしません。これを消極的な信仰と名づけてよいでしょう。神は信じているのですが、それ以上、具体的な行動を取りません。けれども、積極的な信仰と呼んでいいでしょう、信仰を積極的に働かせるのです。すると、それは具体的な行動に出ます。それは、長血を患う女のように、かっこいいものではないかもしれませんが。恥ずかしいこと、体裁が悪いこと、また他の人からは誤解されて、批判を受けてしまうようなことかもしれません。しかし、一歩踏み出すのです。

30 イエスも、自分のうちから力が出て行ったことにすぐ気がつき、群衆の中で振り向いて言われた。「だれがわたしの衣にさわったのですか。」31 すると弟子たちはイエスに言った。「ご覧のとおり、群衆があなたに押し迫っています。それでも『だれがわたしにさわったのか』とおっしゃるのですか。」32 しかし、イエスは周囲を見回して、だれがさわったのかを知ろうとされた。

これはとても興味深い会話です。たくさんの人がイエス様に触れているのに、彼女が少し触れたことで、ご自身から力が出て行ったことをイエス様は感じられました。つまり、イエス様に触れること、力が出て行くように触れることには、信仰によって触れるということが分かります。多くの人が、聞いてはいるけれども、信仰を持って聞いていません。また多くの人が、心から信じてイエス様を受け入れていません。けれども、信じて受け入れるのであれば、イエス様から力が流れます。そして、その力は魂を救い、時にこのように体の救い、つまり癒しも与えられるのです。

33 彼女は自分の身に起こったことを知り、恐れおののきながら進み出て、イエスの前にひれ伏し、真実をすべて話した。34 イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」

イエス様に対して、恐れおののくことは、何度も出てきます。弟子たちが、嵐が静まったのを見て、恐れしました。彼らはそれで、イエス様に対する認識が変わったと思います。ゲラサ人の地にいた人たちは、レギオンから解放された人を見て、恐ろしくなりました。けれども彼らは、イエス様に出て行ってもらうように願いました。そして今、彼女は自分が癒されたことを知って、恐れおののいています。イエス様の行われることは、恵みの業です。人を解放する業です。しかし、それはあまりにも大きいことなので、恐れおののくほどのものです。彼女の場合は、人々の前で話さなければいけないので、自分がどう非難を受けてもおかしくなかったことでしょう。そもそも、群衆の中に入ることもいけないことだったでしょうから。けれども、彼女はその恵みを話しました。

するとイエス様は、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われます。娘よ、と親愛の思いを込めて語りかけられています。「あなたの信仰が」と強調しておられますね。ここには、励ましがあります。またイエス様ご自身のへりくだりがあります。わたしが癒すことができたのだと言われずに、積極的な信仰の一步を踏んだことを強調されているからです。私たちは、誰に聖霊の賜物があるかとか、能力があるかとかそういう話よりも、はるかに、それを受け取る人々の信仰のほうが大変なのです。信仰がなければ、神を喜ばすことはできないとヘブル書 11 章には書いてあります。そして、「安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」と慰めの言葉をかけておられます。

3B 信じる者だけに見せる力 35-43

ところが、この出来事はさらに、ヤイロの娘が癒されるための残された時間が奪われたことを意味しました。

35 イエスがまだ話しておられるとき、会堂司の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか。」36 イエスはその話をそばで聞き、会堂司に言われた。「恐れなくて、ただ信じていなさい。」

会堂司にとっては、この奇跡の出来事が娘の死をもたらす決定的な時となりました。これは、人間の現実の世界で起こりますね、臓器移植の時などまさにこれではないでしょうか？一人の人が臓器を受けて生きることができるようになったのは、そこに一人のまだ生きることのできる人の命が、人生半ばに取られてしまったことを意味します。

しかし、イエス様はそのあきらめの言葉を見捨てるかのように、言われました。「恐れなくて、ただ信じていなさい。」信じなさい、ではなく、信じていなさいというのが大事ですね、ヤイロはそれまで信じていました。そして、今も信じていなさいということです。そう、これはアブラハムの信仰でもありました。イサクによって、数えきれない子孫が出て来ることを約束されながら、愛する独り子を全焼のいけにえによってささげなさいと命じられました。それでも、彼は信じるのをやめませんでした。そこから出てきたのは、復活の信仰です。イサクを取り戻すことができると信じたのです。ヤイロにも、全く理解できないことを信じなさい、信頼しなさいとイエス様は励ましておられます。

37 イエスは、ペテロとヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれも自分と一緒に行くのをお許しにならなかった。

長血の女を癒されたところで、群衆にもそれ以上、行かせませんでした。それだけでなく、弟子たちも三人だけが行くようにされました。彼らは、その他には高い山での変貌、そして、ゲッセマネの園において、連れて行かれます。イエス様にとって、非常に大事な出来事において三人が選ばれているのですが、その中にヤイロの娘の癒し、いや死者からの蘇りをお見せになるのです。

38 彼らは会堂司の家に着いた。イエスは、人々が取り乱して、大声で泣いたりわめいたりしているのを見て、39 中に入って、彼らにこう言われた。「どうして取り乱したり、泣いたりしているのですか。その子は死んだわけではありません。眠っているのです。」

当時のユダヤ人の葬儀には、雇われの泣き屋がいました。その人がどんなに大事であったかを対外的に示すために、大声で泣いてわめくことを仕事にしていた人々がいたのです。最近、テレビでアフリカのガーナでしたでしょうか、プロの泣き屋がいることを見せていましたが、今でもいるんですね。

けれども、イエス様は、取り乱すな、泣いたりするなと言われます。これは、嵐の時に慌てていた弟子たちに対する姿勢と似ています。主の心は平安でした。これから、嵐よりも、そしてレギオンよりも、もっと大きな敵の力を制圧することになります。それは、死そのものです。「最後の敵として滅ぼされるのは、死です。(1コリ 15:26)」とパウロは言いました。イエス様は、「その子は死んだわけではありません。眠っているのです。」と言われます。眠っているというのは、ヨハネ 11 章のラザロの死で明らかにされましたが、死んでいることを指しています。眠るのは起きるためではありますが、同じように死んでいるけれども、よみがえるということを言い表すために、その死が一時的であることを「眠っている」と語られたのです。

40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子どもの父と母と、ご自分の供の者たちだけを連れて、その子のいるところに入って行かれた。

あれほど泣きわめいていた者たちが、あざ笑う余裕があります。これだけ、人の感情は移ろいやすいことを良く教えています。私たちはキリスト者の信仰について、たとえ全く感じなくとも、激的な霊的体験をすることができます。それは、感情をはるかに超えた、とてつもなく深い部分で起こるからです。そしてその霊的な力は、イエス様の言葉への信頼から来ます。

そして、このあざ笑いは不信仰を示していました。それで、イエス様はそういった人々は外に出されました。すべてが信仰によることが、よく分かります。長血を患う女は信仰によって、イエスの御力を経験しました。ここでも同じで、信仰に拠らなければ復活を見ることさえできないのです。当時のイスラエルでは、今もそうですが、すぐに遺体は埋葬されます。ですので、埋葬の準備のために他の部屋に入れられていたので、そこにヤイロとその妻、そしてご自身と三人の弟子だけでお入りになりました。

41 そして、子どもの手を取って言われた。「タリタ、クム。」訳すと、「少女よ、あなたに言う。起きなさい」という意味である。

タリタというのは、子羊という意味合いもあります。イエス様の言葉がとても優しいです、先の女

に対しては「娘よ」と呼びかけておられました。イエス様の親愛なる感情がここに表れています。ところで、この現場にいたペテロは後に、リダにいるドルカスという女弟子を死者の中からよみがえらせました。その時に、皆を外に出して「タビタ、起きなさい(使 9:40)」と言います。「タビタ、クミ」です。イエス様に倣ったのでしょう、ペテロはすばらしいです。何でも、イエス様に倣ったのです。

42 すると、少女はすぐに起き上がり、歩き始めた。彼女は十二歳であった。それを見るや、人々は口もきけないほどに驚いた。

人々が驚いています、マルコの福音書は、イエス様の奇跡を見て驚いているという言葉が数多く出ますが、ここでは口もきけないほどの驚きです。そのとおりでしょう、死んでいたのに生き返ったのですから。イエス様の福音は、人を驚かせます。これまでになかったことです。神の介入とは、こういうものです。

それから、「彼女は十二歳であった」というのが興味深いです。なぜなら、長血を患っていた女は、十二年間、患っていたからです。彼女がこの問題を持ち始めた時に、この女の子が産まれました。ヤイロの家に喜びをもたらしました。そして、今度は彼女の病が治った時に、ヤイロの娘が死んでしまいました。しかし、娘はさらに大きな奇跡を見ます。病の癒しではなく、復活です。それぞれの人生は対照的ではありますが、けれども主は同じように憐れみと恵みを施してくださいました。これが、恵みの多様性です。ちょうど、太陽の光線が虹の七色に別れるように、私たちの受けた恵みはいろいろな色を持っています。いろいろな人がいろいろな証しを持っています。しかし、それを合わせると、そこには輝く光になっており、それが神の栄光となっているのです。

43 イエスは、このことをだれにも知らせないようにと厳しくお命じになり、また、少女に食べ物を与えるように言われた。

イエス様は、すばらしいです。ご自身の死に対するまでの偉大な力を、個人的にお見せになりました。ご自身の復活の力でさえ、信じている者たちにのみお見せになります。サタンからは、神の子だから石をパンにしろとか、神殿の頂から落ちて見ろとか試されますが、決してご自分のために用いたり、不必要に人に見せびらかせることをされませんでした。もっと大事なことは、イエス様のすばらしさを、ご自身を慕い求める者に、信じている者に知ってもらうことです。信じていない者には、その栄光も力も見ることができません。主は、再臨の時にはすべての目がそれを見るようにされますが、それまでの間、一人一人に個人的に、ご自身の優しさと愛と共にお見せになります。ずっと死んでいて食事を当然ながら取っていなかったのです、それで体のために食べ物を与えるように言われます。そうやってイエス様の関心は、少女が良くなったことに対して向けられていたのです。